

日本簿記学会ニュース

No. 63:7/2017

《部会の経過報告》

第33回関西部会は、平成29年5月20日(土)に中部大学(準備委員長:澤村隆秀氏)にて、第33回関東部会は、平成29年6月10日(土)に石巻専修大学(準備委員長:関根慎吾氏)にて、開催されました。詳しい内容は本紙部会記をご覧ください。

《全国大会のご案内》

第33回全国大会を下記の予定で開催いたしますので、お知らせいたします。

2017年8月24日(木)～26日(土)
明治大学駿河台キャンパス

研究部会報告 16:35～18:05

役員選挙 13:30～18:30

懇親会 18:30～20:00

(リバティータワー 23階 燦・宮城・岸本ホール)

【8月24日(木)】

学会賞審査委員会 12:00～14:00

選挙管理委員会 14:00～15:00

理事会 15:00～18:00

【8月26日(土)】

自由論題報告 9:20～11:05

第1会場

報告①:水谷文宣(関東学院大学)

「IoTによる帳簿と募金箱の連動」

報告②:村上翔一(明治大学)

「所有者における電子マネーの会計処理」

報告③:竹島貞治(金沢大学)

「会計事象の関係性に基づく複式記入の説明」

第2会場

報告①:海住信行(高田短期大学)

「『教養としての簿記』の指導教材と指導法の研究」

報告②:中野貴元(全国経理教育協会)

「『民間簿記学』・『小學校用簿記学』における導入教育としての単式簿記法」

第3会場

報告①:日高 宏(元・日産ディーゼル工業)

「立ち上がり当初の簿記の記帳方法と借方貸方の由来」

報告②:西村昭一郎(龍谷大学)

「商品勘定3分割の意義」

統一論題討論 11:30～13:00

新理事会 13:40～15:10

【8月25日(金)】

高校簿記教育懇談会 10:00～11:30

会員総会 12:30～13:30

学会賞受賞講演 13:30～14:00

統一論題報告 14:10～16:25

〈統一論題〉

『資産会計と複式簿記—財務諸表の表示と勘定科目をめぐって—』

司会 田代樹彦(名城大学)

報告①:中村英敏(中央大学)

「商品売買取引における簿記処理の再検討」

報告②:渡邊雅雄(明治大学)

「予想損失モデルに基づく金融資産の減損処理と複式簿記」

報告③:宗田健一(鹿児島県立短期大学)

「新リース会計基準における簿記処理と表示・開示」

報告④:齊野純子(関西大学)

「複式簿記と財務報告の乖離—その意味を求めて—」

日本簿記学会第33回関西部会記

中部大学
準備委員長 澤村隆秀

2017年5月20日(土)、日本簿記学会第33回関西部会は中部大学名古屋キャンパスにて開催された。統一論題報告と自由論題報告の2部構成であり、自由論題報告のあと、統一論題討論が行われた。統一論題のテーマは「電子化社会の本格化と複式簿記の終焉」である。参加者は約80名であった。

統一論題座長の柴健次氏(関西大学)の進行のもと、以下の3名が報告を行った。

第1報告は、「浸潤する複式簿記シンドローム」工藤栄一郎氏(西南学院大学)である。

本報告では、複式簿記が記録計算技術を超える思考様式であり、その適用範囲も拡大していることから、形式も実質も依然として堅固なものであると主張した。そこで、まず複式簿記の本質を複式記入と利益の二重計算から指摘し、会計人の視野や思考による制約を明らかにした。次に、浸潤する複式簿記シンドロームとして企業会計以外への複式簿記適用拡大を示し、様々な考察が行われた。

第2報告は、「帳簿の電子化と複式簿記の役割」坂上学氏(法政大学)である。

本報告では、複式簿記における元帳や仕訳帳が電子化社会到来でどのように電子化されているのかを概観し、変化することのない部分は何であるかを検討した。さらに、仕訳帳と総勘定元帳との同質性から帳簿が物理的に存在する意味を検討した。これらのことから、複式簿記に残された役割は記録データの閲覧という表現論理であるかもしれないと指摘した。

第3報告は、「複式簿記システムの変容—情報処理システムとしての複式簿記の単式簿記化—」高須教夫氏(兵庫県立大学)である。

本報告では、人から機械(コンピュータ)へ簿記処理の手続が変質したことによる記録の単式化、帳簿組織の相互無関係化を明らかにし、さらに複式簿記における複記の意味を二面記録と二重(利益)計算から検討を行った。そして二面記録および二重(利益)計算の調整プロセスについて前者は仕訳帳への

仕訳と元帳への転記、後者は決算(諸表の作成)を取り上げ、収益費用アプローチと資産負債アプローチにおける思考を検討し、複式簿記のレーゾン・デートルを明らかにした。

自由論題報告は田代樹彦氏(名城大学)の司会のもと、「わが国における資金会計組織の発展」片桐俊男氏(愛知県立岩倉総合高等学校)による第1報告が行われた。

本報告では、資金会計組織研究を5つの発展過程に区分して検討を行った。第1区分は従来型損益会計組織、第2区分は未分離型会計組織、第3区分は部分独立型資金会計組織、第4区分は完全独立型資金会計組織、第5区分は統合型会計組織である。これら5区分を染谷学説、鎌田学説、佐藤学説にまとめ、第5区分を中心に報告が行われた。

次に、菅原智氏(関西学院大学)の司会のもと、「簿記・会計教育におけるコンピューターの利用」清水泰洋氏(神戸大学)による第2報告が行われた。

本報告では、教育現場におけるコンピュータ利用の現況および簿記・会計教育におけるコンピュータの効果的利用について検討が行われた。またLMS(学習管理システム)の検討を行い、Moodleを取り上げ、教育実践について簿記の授業、問題例など事例を紹介しながらその効果、問題・課題を指摘し、将来展望を行った。

その後、座長の柴先生のもと、統一論題討論が行われ、活発な議論がなされた。引き続き、懇親会が開催され、和気藹々とした雰囲気でのうちに終了した。



統一論題討論写真 左より柴健次氏、高須教夫氏、坂上学氏、工藤栄一郎氏

日本簿記学会第 33 回関東部会記

石巻専修大学
準備委員長 関根慎吾

日本簿記学会第 33 回関東部会は、平成 29 年 6 月 10 日（土）に、石巻専修大学にて開催された。本部会では、特別講演並びに自由論題報告・討論の 2 部構成で行なわれた。

特別講演では、竹中徹氏（石巻専修大学）の司会のもと、石川純治氏（駒澤大学）より「簿記とは何であり、何でありうるのか」と題して、ご講演をいただいた。石川氏は、まず複式簿記が専門外の人たちにとって魅力的なものとなっていないのではないかという問題意識の下、複式簿記の本質観を学会が社会に対し提示していくことが重要であると指摘する。その上で、その本質に接近する 2 つの視点（論理的相対化と史的相対化）が提示された。前者では、現に存在する複式簿記（損益計算）と現に存在しない複式簿記（キャッシュ・フロー計算）の相対化による構造的同型性の解明と、これを通じた複式簿記の構造が示された。また後者では、比較貸借対照表を出発点とする資金計算書の発展過程を構造的にとらえることにより、その過程が共通の構造に基づくキャッシュ・フロー計算の史的形態変化であることが示された。なお、余談だが、こうしたトピックを横断的に貫くものをみる、総論の学習こそが、大学教育の本質ではないかと指摘した。

最後に、東日本大震災の被災地である石巻での部会開催を踏まえて、簿記会計を研究するということはどういうことかを考えてほしいと、参加者に問いかけた。

特別講演に引き続き、自由論題報告として 3 名による報告と討論が行われた。なお、第 1 並びに第 2 報告については、報告テーマが簿記導入教育におけるキャッシュ・フロー計算書の位置づけを検討しており、両報告を合わせて討論することが、司会の岡野知子氏（石巻専修大学）から提案され、了承された。

第 1 報告は、加藤大吾氏（早稲田大学）による「簿記教育におけるキャッシュ・フロー計算書の有用性」であった。キャッシュ・フロー計算書は各種簿記検定試験の下級の出題範囲に含まれていないことか

ら、簿記初学者の多くがこの計算書に触れる機会がない。しかし、勘定分析による同計算書の作成は一種の逆進推定問題であり、簿記教育の初期段階においても十分に指導でき、さらに貸借対照表と損益計算書の各勘定の増減内容について、考えるきっかけを与えることができるため、複式簿記や会計の基本構造に対する理解を深めることができると、簿記会計教育上の有用性を指摘した。

第 2 報告は、山本貴啓氏（立正大学）による「AI 時代における簿記教育の在り方について」であった。昨今の AI の発展によって、人間と AI でそれぞれの得意分野を分担し、仕事を進めていくことが求められると指摘されている。そこで簿記の導入教育においては、①会計の理解を深めることを目的にキャッシュ・フロー計算書を取り入れる、②今後の日本経済を活性化させるために必要な、起業を支援する人材を養成するという目的から、厚生年金や労災保険、法人税等の申告業務などの会計業務の知識を習得させる、③資本と利益の区分の理解を深めることを目的に、株式会社会計を扱うことを提唱した。

第 3 報告は、成川正晃氏（東北工業大学）の司会のもとで、水谷文宣氏（関東学院大学）による「慈善目的の保険としてのタカフルの仕訳」であった。タカフルとはイスラーム金融の 1 つであり、クルアーンにおいては慈善目的の保険とされている。本報告では、マレーシアにおいてタカフルを含むマレーシア保険業を監督するマレーシア中央銀行が要求する会計処理と、パキスタンのイスラームに立脚した慈善団体ディーブ財団の事例をもとに、タカフルの経済実態を反映できる仕訳を考察した。水谷氏は、タカフルの会計は我が国の民間非営利組織の経済実態を、会計的に把握することにも応用が可能であるとして、その研究の意義を説明した。

その後の懇親会では、会長の中野常男氏のご挨拶と乾杯のご発声の後、会員間の懇親を深めることができた。

今回、復興途上にある被災地石巻で本部会を開催するにあたり、会員の皆様の多大なるご支援、ご協力に加えて、部会運営に関してもご理解を賜りましたことを、心より感謝申し上げます。

《日本簿記学会第 33 回全国大会における役員選挙について》

日本簿記学会第 33 回関東部会（於：石巻専修大学，平成 29 年 6 月 10 日）理事会において，平成 29 年 8 月 25 日・26 日に明治大学で開催される日本簿記学会第 33 回全国大会における役員選挙について検討が行われ，次の要領で選挙を行うことが決定されました。

選挙管理委員会委員長 北村信彦

I. 理事選挙について

理事の選挙は，大会期間中の会員の直接選挙方式により実施する。

1. 投票の日時と会場

投票日時：平成 29 年 8 月 25 日（金）13 時 30 分より 18 時 30 分まで

会場：明治大学駿河台キャンパス

2. 選挙権を有する会員

(1) 選挙権を有する会員は，平成 28 年度までに入会し，会費の納入がある会員である。賛助会員については，その法人の代表者 1 名が選挙権を有する。（注）平成 30 年 3 月 31 日付け退会者は選挙権を有する。

(2) 会費を 2 年間以上滞納している者は，選挙権を有しないが，7 月 31 日までに会費を納入すれば復権する。

3. 被選挙権のない会員

(1) 本学会会長経験者および理事連続二期就任者。該当会員の氏名は投票会場に掲示する。

(2) 平成 29 年 8 月 24 日の理事会で入会および退会を認められた者。ただし，平成 30 年 3 月 31 日付け退会者は被選挙権を有する。

4. 所属機関のない会員の所属

退職等により，所属機関のない会員は，当該会員の申し出によって所属を決定す

る。ただし，名誉教授は，当該名誉教授の大学に所属する。

5. 投票・無効票

(1) 投票は，10 名無記名連記で氏名のみを記入する。10 名に満たない投票は有効とするが，同一人を複数連記した投票はその全体を無効とする。

(2) 姓だけの記入および不正確な氏名の記入は，その記入についてのみ無効とする。

6. 選挙結果の報告

選挙の結果は，翌日（8 月 26 日）に明治大学にて公示する。

7. 選挙結果に基づく，新理事への 8 月 26 日開催の新理事会開催連絡は，公示により行う。

II. 会長選挙について

1. 日時と会場

新理事会は，8 月 26 日（土）13 時 40 分より 15 時 10 分まで明治大学駿河台キャンパスにて開催し，理事による単記無記名の投票によって会長選挙を行う。

2. 選挙結果の報告

(1) 会長選挙の結果は，当該理事会の席上で発表し，新会長は副会長を指名し，当該理事会で報告する。

(2) 新会長および副会長の氏名は，新理事会終了後に学会ホームページ等にて公示する。

なお，会員の先生方におかれましては，日本簿記学会役員選挙内規を合わせてご覧ください。

編集後記

明治大学において開催されます全国大会時に理事選挙が行われ，幹事もその時に改選になります。任期中はご不便をおかけしたこともあるかと存じますが，先生方のご協力のおかげで何とかお役目を果たせました（と信じたいところです）。残りわずかではございますが，中野会長の下で任期終了まで業務に邁進してまいります。

（小澤康裕・中村亮介・兵頭和花子・和田博志・渡邊貴士）

発行所
編集兼
発行人

日本簿記学会事務局

事務連絡所

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-1-15
株式会社白桃書房

e-mail boki@hakutou.co.jp

URL <http://www.hakutou.co.jp/boki/>